

# 新潟県中越地域にみられる特徴的な番付について

## Study on the characteristic numbering system (Banzuke) examined in the Niigata pref. at Chuetsu area

平山 育男  
HIRAYAMA Ikuo

キーワード: 番付

Keywords : Numbering system (Banzuke)

### 1 はじめに

中越地震以後、長岡周辺地域で幾つかの歴史的な建造物の解体及び建築調査に関わる機会を得たが、この現場では日常的には望見することのできない部分の観察や調査が可能であった箇所が多々あった。そのような中で特に特徴ある番付に幾つか出合った。番付の調査からは、一般的には建物の建築順序、建築範囲などを把握に加え、場合によっては建築年代を知ることも可能であるが、今回はこの特徴的な番付の使用例について報告して、この命名を行うとともに、併せてその使用された地域、使用された年代の範囲を考察するものである。

### 2 特色ある番付について

まず、本章では特色ある番付を持つ建物と、その番付について解説を行い、次いでこの特色ある番付の命名を行いたい。この特色ある番付を最初に発見したのは長岡市山古志（旧山古志村）の旧星野家住宅である。

#### ・旧星野家住宅主屋の番付<sup>1)</sup>

旧星野家住宅は、長岡市山古志竹沢二丁野に所在した。当該住宅は旧山古志村内にあっては大規模な部類に属し、建築年代も明治時代に遡るものとして、従来から認識されていた。ところで、当家庭住宅主屋は平成 16(2004)年 10 月 23 日の中越大地震において被災し、各部に損傷を負った。長岡市では当該住宅について歴史的建造物としての学術調査を行うとともに建物を解体し、復原使用可能な部材を保管場所である旧長岡農業高校種芋原分校へ搬入することとなった。一連の解体においては部材を逐一観察・調査することができ、各部から以下に見るような①から④、4 種類の番付が発見された。これらは以下のように整理することが可能で、図示すると図 1 のようになる。

#### ①主屋下屋

主屋の南面、東面及び「ダイドコロ」西面の下屋に、「いろは」と漢数字による組合せ番付が見られた。この番付は筆書で、土台、柱、軒桁などに共通して見られた。但し、南面下屋柱筋は「いろは」のみによるものである。この番付は、「ダイドコロ」の南側下屋の側柱筋中央の柱北面に「い拾六」とあり、後述する主屋上屋の数字のみによる組合せ番付とは異なり、下屋だけのものであることは確かであった。なお、この番付の振り方は一般のものに比べるとやや変則的であった。その詳細は以下に述べる通り

である。

即ち、桁行の始点は「ダイドコロ」の南側下屋筋で、次いで南側下屋床の間南西角の柱北面に「に能壺」、オザシキ南側中程の柱北面に「へ能壺」、オザシキ南東角の柱北面に「り能壺」などとあったことから、東の玄関、ウマヤなどの側柱には「た」の記載が認められたことから、桁行は半間を基本に「い」～「た」を振るものと考えられた。

一方、梁行は、南側下屋側柱筋は「いろは」のみが振られるもので、半間入った、オザシキ南側の部屋境で、既に述べたように「に能壺」、「へ能壺」などの記載が確認された。次いで、南側下屋側柱筋から 1 間入ったコマ南東隅柱北面からは「よの二」とあり以下、半間間隔で数字が増え、北東隅のウマヤ北東隅から 2 本目の柱北面からは「よ能二拾三」が確認された。以上より、梁行きでは南側下屋側柱筋では数字を振らず、次に半間入った筋が「壺」、以下半間間隔で「二拾三」まで振られたことが確認された。

即ち、下屋では桁行梁行とも半間間隔で、桁行には「いろは」、梁行には漢数字の番付が振られるものの、南側下屋柱筋は「いろは」のみとなる番付であった。

#### ②主屋上屋

主屋の上屋部分では、数字のみによる組合せ番付が見出された。この番付も土台、柱、梁など軸部全体を通して振られるものであり、下屋の番付と同様に筆書で、これも以下に述べるように、一般に見られるものに比べるとやや変則的なものであった。

即ちこの番付の桁行における始点は南側上屋筋で、オザシキ裏棚南西角柱北面には「壺角」、マエザシキ南西角の柱北面に「六」、マエザシキ南東角柱北面には「拾角」と記されていた。以上より、主屋上屋桁行では基本的に、漢数字を半間間隔に「壺」～「拾」まで振り、南東、南西角の両端には「角」の文字が伏せられたものと考えられる。

梁行は、オザシキ裏棚南西角柱「壺角」から半間入った柱には「壺能一」、二本目には「壺の二」、三本目には「壺の三」とあり、北側ミズヤ、作業室境の北側部屋境の柱には「四拾一」などとの記載があった。これらから判断すると、梁行は南側上屋側筋が数字だけで、上述のように始点と終点に「角」の語が付されたと考えられる。次いで半間奥が「壺」、以下半間の間隔で「廿拾一」までの数字が振られるものであったと考えることができよう。

つまり、上屋の番付は桁行梁行とも半間間隔で、桁行・梁行ともに漢数字の番付であったが、南側の始点では漢数字 1 文字で、両端には「角」の文字が付されたものであった。

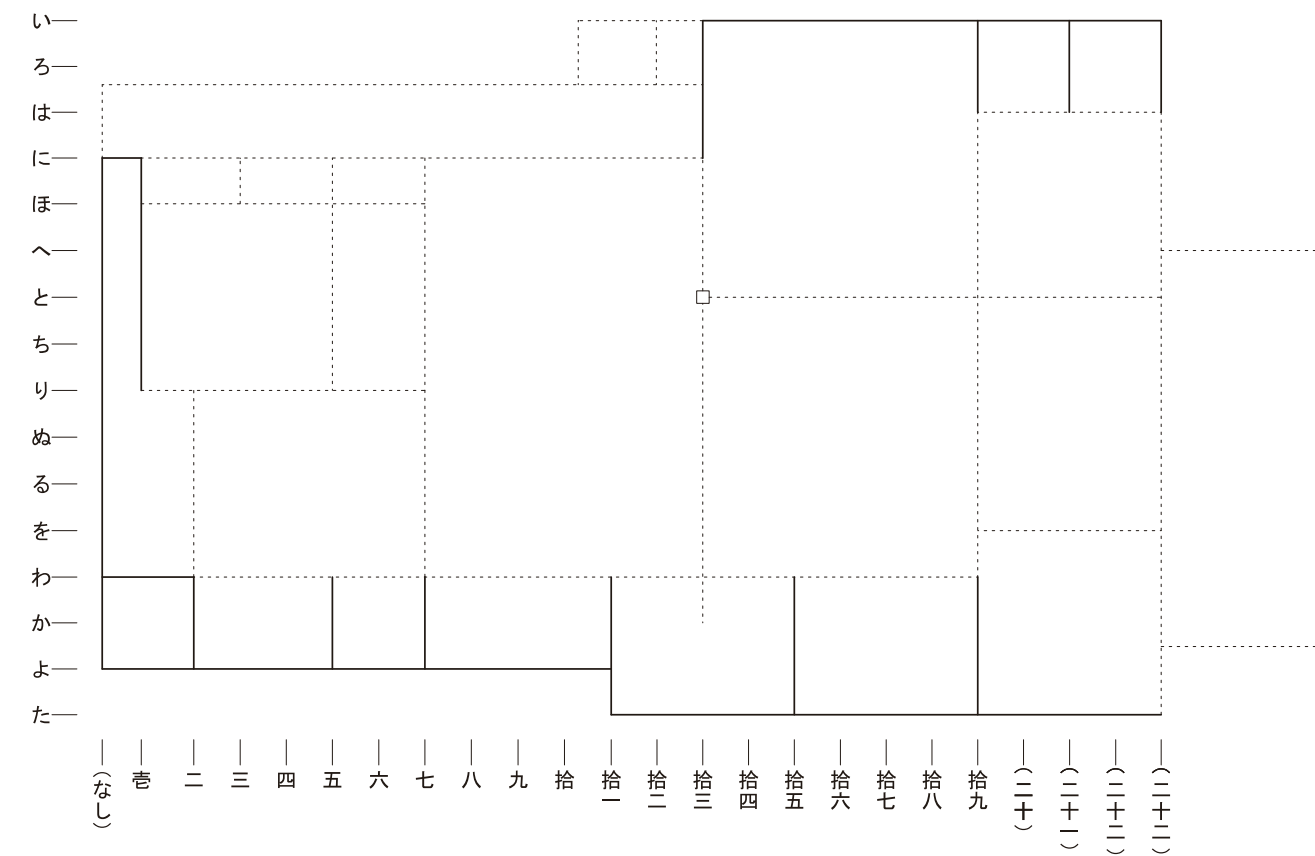
#### ③主屋背面下屋・便所

主屋西側下屋の廊下(西)からは墨刺による番付が発見された。なお、この番付は同箇所の壁板に転用されていた板図の番付とも合致した。このことから、当該部分は昭和 37(1962)年の増築によるものと考えられた。この番付は、軒桁、梁などにも見ることができた。

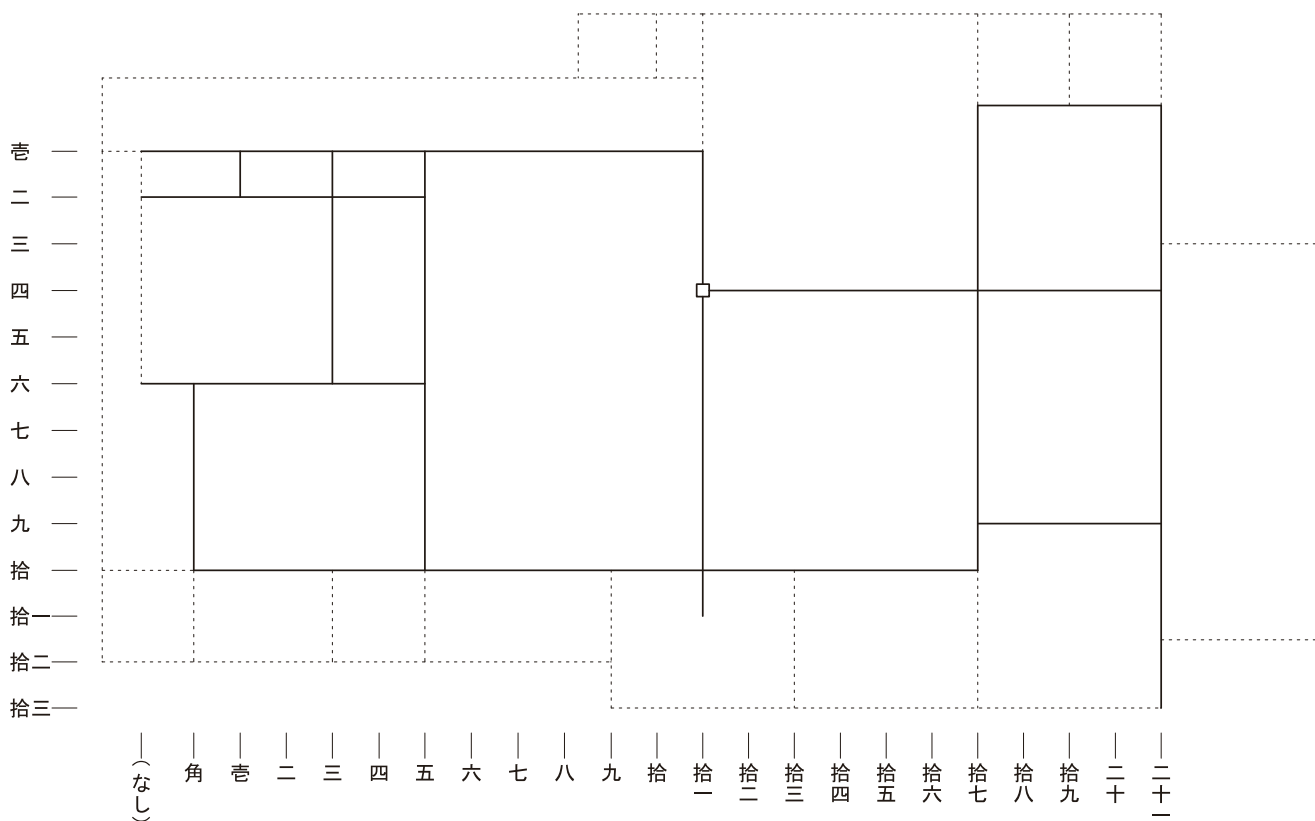
桁行において番付は背面の便所西側を「い」、以下半間間隔で、「ろ」、「は」、「に」と振るもので、上屋西側筋を「ほ」とするものであった。

梁行は、「一」、「二」は板図においても当該部分が切断されても見ることはできなかったが、「三」は、南側側柱から 1 間入った位置で、以後凡そ半間の間隔で、便所北側の柱筋が「十四」となるものであった。

つまり、桁行と梁行ではいろはと漢数字を用いる組合番付であった。



下屋番付図



上屋番付図

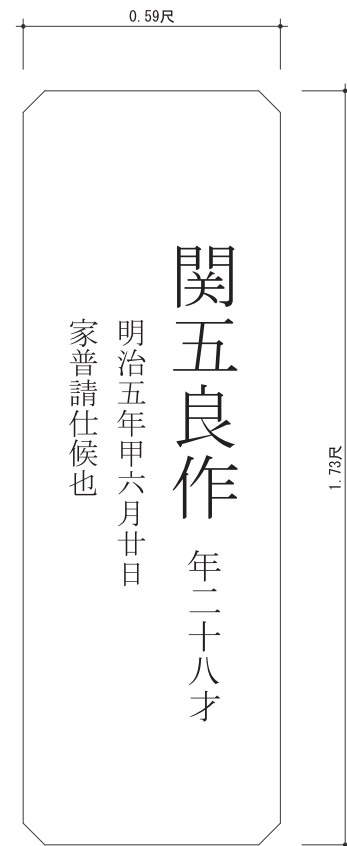
図1 星野家住宅主屋



外観 南西より



オクザシキ 西北より



厚：0.015尺  
材：杉  
仕上：鉋 和釘止め

棟札

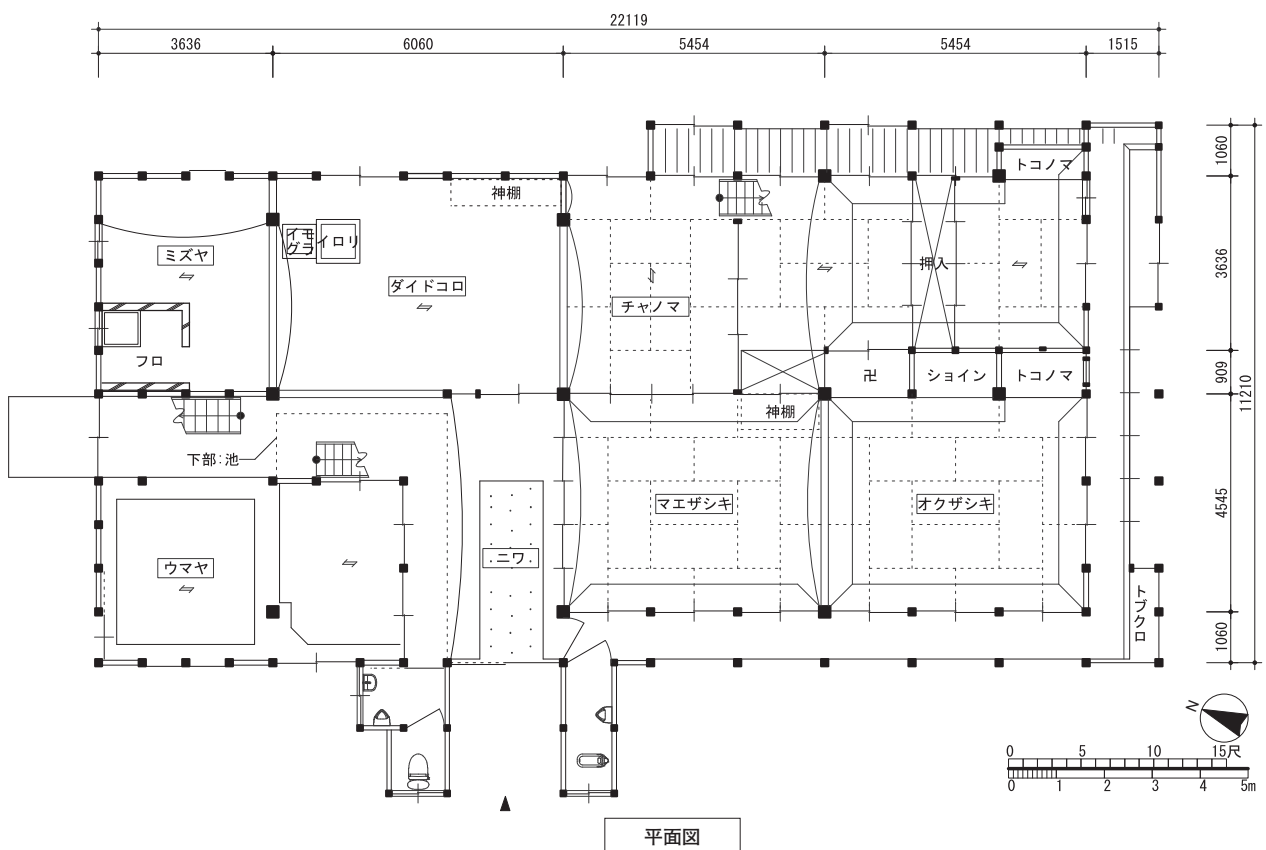


図2 関家住宅主屋

#### ④モノオキ

モノオキ2階小屋束東面に墨刺による番付が発見された。モノオキは昭和37(1962)年の建築によるものであり、これに際してのものと判断されよう。

この番付は北側の軒筋を「イ」、以下半間間隔で「ロ」、「ハ」、「ニ」とするものと予想され、この内「ハ」、「ニ」の番付について確認することができた。

東西方向の桁行では西側を「一」、以下半間の間隔で「二」、「三」とするもので、「九」までが予想され、この内「一」、「二」、「五」、「七」の番付を確認することができた。

このようにモノオキの番付はイロハと数字を用いた組合せ番付であった。

#### ・特徴的な番付「間数組合せ番付」

さて、以上が旧星野家住宅主屋に見られた番付であるが、この内、特徴的なものは①と②になる。これらは、上で見てきたように1列目はいわゆる組合せ番付とはならない。しかし、全体的な傾向を見ると、桁行方向に付される数は柱間の間数を表示しようとする指向性が極めて強いことが分かる。そのため、本論者では仮にこの番付に対し「間数組合せ番付」の名称を付すこととする。

### 3 「間数組合せ番付」の使用例

それでは、この「間数組合せ番付」が周辺の建物においても確認することができるのか、次いではその点を述べて行きたい。なお、類例の紹介をする前に、旧星野家住宅主屋に見られた番付と同じ考え方に基づいて番付を部材に記した建物が、旧山古志村内にあることを紹介しておきたい。

#### ・旧山古志村梶金 関家住宅主屋とその番付<sup>2)</sup>

上述した旧星野家住宅における①②の間数組合せ番付を柱、束の場合、北面の材足下に記していた。番付は経年により判読ができないものや、外周では下見板張りに隠されて解体を伴わないと観察ができないものもあったが、中には室内において日常的に望見できる場所に記されるものもあった。ここで指摘しておきたいのは、原則的には柱、束の足下に記されることであり、決して柄や仕口の内部に記されて建築後に見えなくなるわけではない、ということである。これも特徴的な手法と見なすことができた。

さて、この旧星野家住宅主屋と同様、建築後に見えなくなってしまう柱、束の足下に番付を記す例が旧山古志村内で確認することができた。それは以下に記す関家住宅主屋である。

関家住宅は長岡市山古志東竹沢の梶金に位置する。梶金を含む東竹沢の地は、19世紀初期の化政期以後、竹沢本村の庄屋による不正をただしたことをきっかけに分離独立の動きが強まった。結局、明治14(1881)年、梶金、大久保などの村々は本村から独立して東竹沢村が成立し、関家の関五郎作がその戸長に選ばれている<sup>3)</sup>。関家住宅主屋は、正面13間程、奥行6間程の規模を有する建物で、切妻造平入鉄板瓦棒葺、2階建とする。正面やや下手側に寄り切妻造妻入でチュウモンの入口があり、傍らにカミノベンジョが取り付け、ゲンカンから主屋へ入る。主屋は下手5間半を土間とする。土間は田の字型に4分され、下手表が厩、裏側がミズヤ、上手表がニワ、裏側がガイドコトと呼称されるが、現状でウマヤ及びニワの下手が鯉の養殖池となっている。2階は土間下手と床上裏側に取り付く。構造は梁行の主要な部屋境に梁を渡し、1間間隔の格子状に径1.5尺程の梁材を組み、京呂組の和小屋、軒は半間内側の柱からの出桁を用いたせがい造とするものである。

主屋からは棟束に明治5(1872)年の棟札が発見された。棟札は2枚組の和釘止めで、取り外すと棟束には煤けが見られず、

この棟札が建築当初の建築年代を示すものと考えられた。文面から主屋は当主である関五良作が28才、大工は現長岡市蓬平の大勝新五良、42才の作であることがわかる。そして主屋軸部柱材足下からは数字による組合せ番付が発見され、これを旧星野家住宅主屋と同様、材の足下に付すものであった。この建物では解体を伴わない調査であったため、建物全体における番付の付し方は不明であったものの、両建物は共通する技術的な背景を想定することができそうである。

#### ・長岡市呉服町 旧畠山家住宅土蔵とその番付

畠山家は長岡市の中心市街地である呉服町1丁目3番地に位置した住宅である。柿川沿いに位置する呉服町は近世以来、繊維関係の商家が集まっていたが、畠山家は当主が4代目となる繊維問屋であった。敷地は東西に通る旧街道に面して南面する。敷地は間口12m、奥行45mとなるやや細長いものとなる。建物は前面道路に面して雁木を構え、店舗、奥まって主屋、土蔵と中庭、木造の茶室を中心とする建物が配される。土蔵は主屋に直結して内蔵として使われる。南面で梁行7.6m桁行9.4mの規模で、両妻面と主屋に接する東側面はコンクリート壁、西側面は金属板で覆い、屋根も金属板葺とするため、外観からはここに土蔵のあることをにわかに判別することはできない。土蔵へは南面妻に設けられた入口から入る。ここには開き戸、土戸、板戸、網戸と4重の建具が入れられ、日常的には板戸に鍵をかけて用いていたようである。1階は1室の構成で、中央床下に収納が可能で、東側に寄って箱階段、東西壁際に棚を設け、北妻面の東側に寄って開き戸、格子、外部サッシの形式で窓を開く。2階も1室で南西隅に押入をもうける。窓は南北妻に、真を外して東寄に設け板戸、鉄格子、土戸の構成で、板戸は網戸とガラス戸に代えることもできる。小屋組は地棟が約2尺間隔の垂木を受け、化粧屋根裏天井とする。基礎は石積で土台を回し、軸組は桁行が2尺程、梁行が3尺の間隔で柱を建て、桁行中央に2階床梁、梁行各間に小梁を渡す。屋根は地棟が垂木を受けるもので、妻面中央の柱は棟持となっているようである。

畠山家は当主が4代目で、古くは向かいの敷地において商いを営んでいたとする。明治15(1882)年、現在地において創業し、はじめは官庁からの払い下げ品を扱っていたという。戦中の統制期間には営業を中断したものの、昭和24(1949)年から業務を再開し、戦後は既製服メーカーとして歩んだという。正面の住宅部分は平成元(1989)年の建築で、これに際して土蔵周囲を覆うような仕様となった。ところで、土蔵正面入口内側建具枠には「文政十二丑四月改之」の墨書があり、これが建築年代を考える資料となるのである。「文政十二丑四月改之」の墨書の意味するところは、「この建具枠を文政12(1829)年に改めた」考えてよいだろう。実際、建具枠の裏面を触てみると、切断を受けた太柄が残されており、中古に改造を受けたことは明らかである。となると、この蔵自体の建築年代は文政12(1829)年より更に遡るとするのが妥当である。一般的に土蔵の改造はそうそう行われるものではなく、創建以後30年程度は経っていると見るのが自然だろう。このように考えるとこの蔵の建築年代は18世紀にも遡るとすることができるのである。

土蔵内部の復原を行うと、土蔵1階は上で述べたように扉周りが文政12(1829)年に改造を受けており、以後も数次の補修を受けていることが聞取から明らかとなった。1階には箱階段が置かれるが、この引き出しには「越後国山田町米屋善輔」「長岡山田町こめや善助」「山田町米屋善介」などの墨書銘を見ることができた。聞取によると箱階段は先代が譲り受けたものとされる。また、2階床組を見ると梁組に乱れが見られる。特に扉側1本目の2階床梁は材が新しく、2本目は材が太い。また、両端を金具止として、この材で桁行中央に配される大梁が切断を





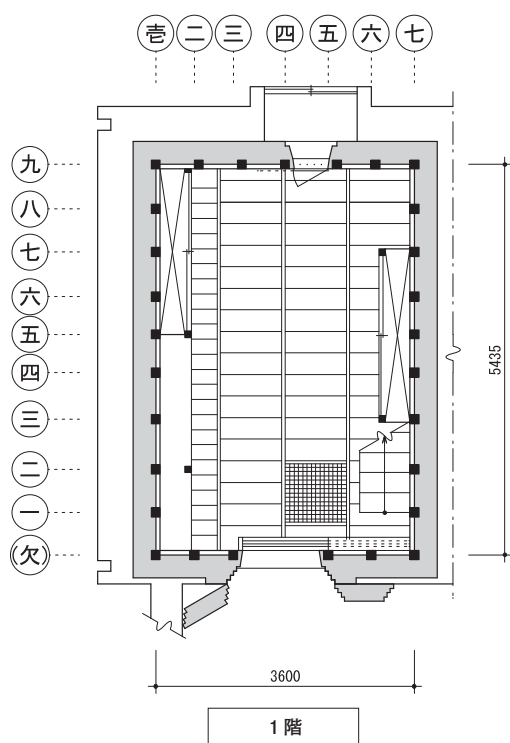
畠山家土蔵 1階 南東より



畠山家土蔵 外観 北西より



畠山家土蔵 2階 南より いずれも田村収撮影



○---発見された番付

畠山家土蔵 平面図 S : 1/100

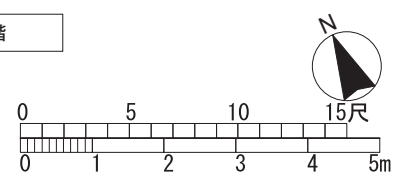
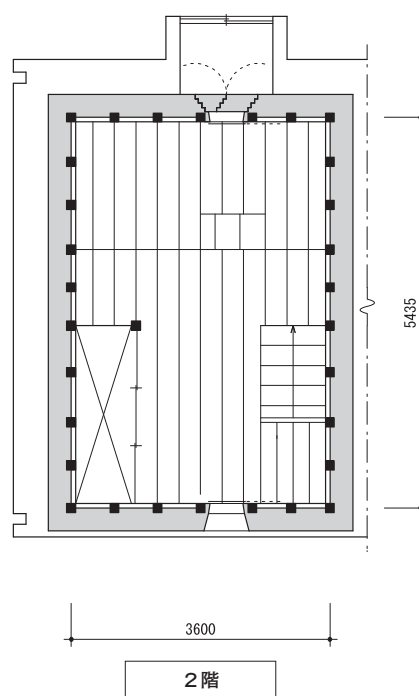


図3 畠山家土蔵

受けていた。これらの点から、箱階段を導入したことにより階段の向きを変えたと考えることができる。当初の階段は扉東側にあり、桁行柱間2間、梁行2間四方が階段のため開けられていたと考えるのが妥当である。2階は押入が中古である。なお、北側窓付近の材には火を受けた焦げ跡が確認された。聞取によれば、かつて隣家から貰い火があったとされる。戊申の役、第2次世界大戦とはまた別の機会における禍火と判断することもできよう。なお、土蔵の外観は観察ができず、当初の形態は明らかではない。

さて、この土蔵1階の柱足下からは件の間数組合せ番付が見い出された。番付は南面する建物の南西隅柱を「壺」とし、以下半間間隔を基本として「二」から「七」までを配し、次列以後で「壺ノ壺」から「壺ノ九」と数字を振るものとなっていた。

#### ・長岡市撰田屋幾那サフラン酒造 帳場蔵

幾那サフラン酒造の帳場蔵はこの程、中越地震からの修理が終了した。詳細は後日発行される予定の修理工事報告書等に期待したいが、この工事で建築年代は大正15(1926)年頃と判明した。併せて、建物2階妻梁に番付が確認され、これが間数組合せ番付であった。棟を東西方向に向けるこの建物では、2階西側妻梁北側に「壺」、南側に「七」の記載があった。そして、半間間隔で10間目の東側妻梁北側には「壺ノ十」、南側には「七ノ十」の記載が見られた。

#### 4 「間数組合せ番付」の使用時期と使用範囲

以上見てきたように、間数組合せ番付は少なくとも複数例確認され、時代的にも地域的にもある広がりを持った分布を示すものと考えられそうである。但し、聞取によれば、現在この間数組合せ番付が使われてはいない。そのためこの番付の使用については時間的・空間的に、ある限定された場所と時間を想定することができそうである。

現在のところ判明する間数組合せ番付の使用例は旧星野家住宅主屋、旧畠山家住宅土蔵、幾那サフラン帳簿蔵の3件であり、類似する可能性のあるものが関家住宅主屋の1件に留まるのであるが、これらを用いて現段階における当該番付の使用時期と使用範囲を想定しておきたい。

##### ・使用時期

間数組合せ番付が使われた最も早い時期は、今のところ旧畠山家住宅土蔵の建立年代と想定される19世紀初期であり、下限は幾那サフラン帳簿蔵の大正15(1926)年となる。

##### ・使用範囲

使用された地域的な範囲は旧星野家住宅主屋の所在する旧山古志村、幾那サフラン帳簿蔵の長岡市撰田屋、旧畠山家住宅土蔵の長岡市呉服町となり、俯瞰的に見ると旧長岡市域を中心として撰田屋、古志郡となる山古志の地域が想定される。なお、関家住宅を手掛けた大工は棟札の記述より、長岡市中心部と山古志の間となる蓬平の出身であることが判明している。

#### 5 小結

以上の考察より、一連の調査等から特色ある「間数組合せ番付」を建物から発見することができた。この番付の特徴を現段階における資料を用いれば以下のようにまとめることができよう。

- 1) 間数組合せ番付は、柱間数を表示しようとする指向性が極めて強い。
- 2) 間数組合せ番付は少なくとも、19世紀初期から大正時代までは用いられた。
- 3) 間数組合せ番付は長岡の中心市街地をはじめ、撰田屋、山古志の地において確認ができる。

#### 謝 辞

畠山家、関家、星野家住宅の調査に際しては、各家から一方ならぬご協力を賜った。記して謝意を申し上げる次第である。なお、図1の畠山家土蔵の撮影は田村修、図1～3の作図は西澤哉子にお願いした。

#### 注 記

- 1) ①平山育男：長岡市（旧山古志村）旧星野家住宅の建築年代と使用された釘について、2007年度日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、87～88頁、平成19(2007).8  
②西澤哉子、平山育男：長岡市山古志竹沢旧星野家住宅 主屋の特徴的な構法、日本建築学会北陸支部研究報告集51、429～432頁、平成20(2008).7  
③平山育男：長岡市山古志竹沢旧星野家住宅 主屋の計画寸法について、日本建築学会北陸支部研究報告集51、433～436頁、前掲  
④平山育男：長岡市山古志竹沢旧星野家住宅 主屋の番付について、日本建築学会北陸支部研究報告集51、437～440頁、前掲
- 2) ①平山育男、西澤哉子：長岡市山古志東竹沢 関家住宅主屋について、日本建築学会北陸支部研究報告集51、421～424頁、前掲  
②平山育男：長岡市山古志東竹沢関家住宅土蔵 新潟県における土蔵の独立した棟持柱について、日本建築学会北陸支部研究報告集51、425～428頁、前掲
- 3) 山古志村役場：山古志村史 通史、349～350頁、昭和60(1985).11